

# 文鳥

夏目漱石

青空文庫



十月早稲田に移る。伽藍がらんのような書齋にただ一人、片づけた顔を頬杖ほおづえで支えていると、三重吉みえきちが来て、鳥を御飼かいなさいと云う。飼つてもいいと答えた。しかし念のためだから、何を飼うのかねと聞いたたら、文鳥ぶんちようですと云う返事であつた。

文鳥は三重吉の小説に出て来るくらいだから奇麗きれいな鳥に違なかうと思つて、じゃ買つてくれたまえと頼んだ。ところが三重吉は是非御飼いなさいと、同じような事を繰り返している。うむ買うよ買うよとやはり頬杖を突いたままで、むにやむにや云つてるうちに三重吉は黙つてしまつた。おおかた頬杖に愛想を尽かしたんだろうと、この時始めて気がついた。

すると三分ばかりして、今度は籠かごを御買いなさいと云いだした。これも宜よろしいと答える、是非御買いなさいと念を押す代りに、鳥籠の講釈を始めた。その講釈はだいぶ込み入こみいつたものであつたが、気の毒な事に、みんな忘れてしまつた。ただ好いのは二十円ぐらゐると云う段になつて、急にそんな高価たかいのでなくつても善よかろうと云つておいた。三重吉はにやにやしている。

それから全体どこで買うのかと聞いて見ると、なにどこの鳥屋にでもありますと、実に

平凡な答をした。籠はと聞き返すと、籠ですか、籠はその何ですよ、なにどこにかあるでしょう、とまるで雲を攫むような寛大な事を云う。でも君あてがなくなっちゃいけないからうと、あたかもいけないような顔をして見せたら、三重吉は頬ぺたへ手をあてて、何でも駒込に籠の名人があるそうですが、年寄だそうですから、もう死んだかも知れませんが、非常に心細くなってしまった。

何しろ言いだしたものに責任を負わせるのは当然の事だから、さっそく万事を三重吉に依頼する事にした。すると、すぐ金を出せと云う。金はたしかに出した。三重吉はどこで買ったか、七子の三つ折の紙入を懐中していて、人の金でも自分の金でも悉皆この紙入の中に入れる癖がある。自分は三重吉が五円札をたしかにこの紙入の底へ押し込んだのを目撃した。

かようにして金はたしかに三重吉の手に落ちた。しかし鳥と籠とは容易にやって来ない。そのうち秋が小春になった。三重吉はたびたび来る。よく女の話などをして帰って行く。文鳥と籠の講釈は全く出ない。硝子戸を透して五尺の縁側には日が好く当る。どうせ文鳥を飼うなら、こんな暖かい季節に、この縁側へ鳥籠を据えてやったら、文鳥も定めし鳴き善かろうと思うくらいであった。

三重吉の小説によると、文鳥は千代千代と鳴くそうである。その鳴き声がだいぶん気に入ったと見えて、三重吉は千代千代を何度となく使っている。あるいは千代と云う女に惚れていた事があるのかも知れない。しかし当人はいつこうそんな事を云わない。自分も聞いてみない。ただ縁側に日が善く当る。そうして文鳥が鳴かない。

そのうち霜が降り出した。自分は毎日伽藍のような書齋に、寒い顔を片づけてみたり、取乱してみたり、頬杖を突いたりやめたりして暮していた。戸は二重に締め切った。火鉢に炭ばかり継いでいる。文鳥はついに忘れた。

ところへ三重吉が門口から威勢よく這入って来た。時は宵の口であった。寒いから火鉢の上へ胸から上を翳して、浮かぬ顔をわざとほてらしていたのが、急に陽気になった。三重吉は豊隆を従えている。豊隆はいい迷惑である。二人が籠を一つずつ持っている。その上に三重吉が大きな箱を兄き分に抱えている。五円札が文鳥と籠と箱になったのはこの初冬の晩であった。

三重吉は大得意である。まあ御覧なさいと云う。豊隆その洋灯をもつとこつちへ出せなと云う。そのくせ寒いので鼻の頭が少し紫色になつてゐる。

なるほど立派な籠ができた。台が漆で塗つてある。竹は細く削つた上に、色が染けてあ

る。それで三円だと云う。安いなあ豊隆と云っている。豊隆はうん安いと云っている。自分  
は安いか高いか判然と判らないが、まあ安いなあと云っている。好いものになると二十円  
もするそうですと云う。二十円はこれで二返目である。二十円に比べて安いのは無論であ  
る。

この漆はね、先生、日向へ出して曝しておくうちに黒味が取れてだんだん朱の色が出て  
来ますから、——そうしてこの竹は一返善く煮たんだから大丈夫ですよなどと、しきりに  
説明をしてくれる。何が大丈夫なのかねと聞き返すと、まあ鳥を御覧なさい、奇麗でし  
ようと云っている。

なるほど奇麗だ。次の間へ籠を据えて四尺ばかりこつちから見ると少しも動かない。薄  
暗い中に真白に見える。籠の中にうずくまっていなければ鳥とは思えないほど白い。何だ  
か寒そうだ。

寒いだらうねと聞いてみると、そのために箱を作ったんだと云う。夜になればこの箱に  
入れてやるんだと云う。籠が二つあるのはどうするんだと聞くと、この粗末な方へ入れて  
時々行水を使わせるのだと云う。これは少し手数が掛るなと思っていると、それから  
糞をして籠を汚しますから、時々掃除をしておやりなさいとつけ加えた。三重吉は文鳥の

ためにはなかなか強硬である。

それをはいはい引受けると、今度は三重吉が袂たもとから粟あわを一袋出した。これを毎朝食わせなくつちやいけません。もし餌えをかえてやらなければ、餌壺えつぼを出して殻からだけ吹いておやんなさい。そうしないと文鳥が実みのある粟を一々拾い出さなくつちやなりませんから。水も毎朝かえておやんなさい。先生は寝坊だからちようど好いでしよう和大変文鳥に親切きわを極めていゝ。そこで自分もよろしいと万事受合うあつた。ところへ豊隆が袂たもとから餌壺と水入を出して行儀よく自分の前に並べた。こういつさい万事を調ととえておいて、実行せまを逼せまられると、義理にも文鳥の世話をしなければならなくなる。内心ではよほど覚おぼ束つかなかつたが、まずやってみようとまでは決心した。もしできなければ家うちのものが、どうかするだろうと思つた。

やがて三重吉は鳥籠ていねいを叮ていねいに箱の中へ入れて、縁えん側がわへ持ち出して、ここへ置きますからと云つて歸つた。自分は伽藍がらんのような書齋しよの真中に床を展のべて冷ひやかに寝た。夢に文鳥を背負しよい込こんだ心持は、少し寒かつたが眠ねぶつてみれば不斷ふだんの夜よるのごとく穩ゆかである。

翌朝よくあさ眼まなこが覚さめると硝子戸ガラスドに日ひが射やしている。たちまち文鳥に餌えをやらなければならぬいなと思つた。けれども起きるのが退儀たいぎであつた。今にやろう、今にやろうと考えている

うちに、とうとう八時過になった。仕方がないから顔を洗うついでをもつて、冷たい縁を素足<sup>すあし</sup>で踏みながら、箱の蓋<sup>ふた</sup>を取つて鳥籠を明海<sup>あかるみ</sup>へ出した。文鳥は眼をぱちつかせている。もつと早く起きたかつたらうと思つたら気の毒<sup>あはれ</sup>になった。

文鳥の眼は真黒である。瞼<sup>まぶた</sup>の周囲<sup>まわり</sup>に細い淡紅色<sup>ときいろ</sup>の絹糸を縫いつけたような筋<sup>すじ</sup>が入っている。眼をぱちつかせるたびに絹糸が急に寄つて一本になる。と思うとまた丸くなる。籠を箱から出すや否や、文鳥は白い首をちよつと傾<sup>かたむ</sup>けながらこの黒い眼を移して始めて自分の顔を見た。そうしてちちと鳴いた。

自分は静かに鳥籠を箱の上に据<sup>す</sup>えた。文鳥はぱつと留<sup>とま</sup>り木を離れた。そうしてまた留り木に乗った。留り木は二本ある。黒味がかつた青<sup>あお</sup>軸<sup>おし</sup>をほどよき距離に橋と渡して横に並べた。その一本を軽く踏まえた足を見るといかにも華<sup>き</sup>奢<sup>やし</sup>にできている。細長い薄<sup>うす</sup>紅<sup>くれない</sup>の端に真珠<sup>けず</sup>を削<sup>けず</sup>つたような爪が着いて、手頃な留り木を甘<sup>うま</sup>く抱<sup>かか</sup>え込んでいる。すると、ひらりと眼先が動いた。文鳥はすでに留り木の上で方向<sup>むき</sup>を換えていた。しきりに首を左右に傾<sup>かたむ</sup>ける。傾<sup>かたむ</sup>けかけた首をふと持ち直して、心持前<sup>の</sup>へ伸<sup>の</sup>びたかと思つたら、白い羽根がまたちらりと動いた。文鳥の足は向うの留り木の真中あたりに具合よく落ちた。ちちと鳴く。そうして遠くから自分の顔を覗<sup>のぞ</sup>き込んだ。

自分は顔を洗いに風呂場へ行つた。帰りに台所へ廻つて、戸棚を明けて、昨夕三重吉の買つて来てくれた粟の袋を出して、餌壺の中へ餌を入れて、もう一つには水を一杯入れて、また書齋の縁側へ出た。

三重吉は用意周到な男で、昨夕叮嚀に餌をやる時の心得を説明して行つた。その説によると、むやみに籠の戸を明けると文鳥が逃げ出してしまふ。だから右の手で籠の戸を明けながら、左の手をその下へあてがつて、外から出口を塞ぐようにしなくつては危険だ。餌壺を出す時も同じ心得でやらなければならない。とその手つきまでして見せたが、こう両方の手を使つて、餌壺をどうして籠の中へ入れる事ができるのか、つい聞いておかなかつた。

自分はやむをえず餌壺を持つたまま手の甲で籠の戸をそろりと上へ押し上げた。同時に左の手で開いた口をすぐ塞いだ。鳥はちよつと振り返つた。そうして、ちちと鳴いた。自分分は出口を塞いだ左の手の処置に窮した。人の隙を窺つて逃げるような鳥とも見えないので、何となく気の毒になつた。三重吉は悪い事を教えた。

大きな手をそろそろ籠の中へ入れた。すると文鳥は急に羽搏を始めた。細く削つた竹の目から暖かいむく毛が、白く飛ぶほどに翼を鳴らした。自分は急に自分の大きな手が厭

になつた。粟あわの壺と水の壺を留り木の間にようやく置くや否や、手を引き込みました。籠の戸ははたりと自然ひとりでに落ちた。文鳥は留り木の上に戻つた。白い首を半なかば横に向けて、籠の外にいる自分を見上げた。それから曲げた首を真直まっすぐにして足の下もとにある粟と水を眺めた。自分は食事をしに茶の間へ行つた。

その頃は日課として小説を書いている時分であつた。飯と飯の間はたいてい机に向つて筆を握つていた。静かな時は自分で紙の上を走るペンの音を聞く事ができた。伽藍がらんのような書齋へは誰も這入はいつて来ない習慣であつた。筆の音に淋さびしさと云う意味を感じた朝も昼も晩もあつた。しかし時々はこの筆の音がびたりとやむ、またやめねばならぬ、折もだいぶあつた。その時は指の股またに筆を挟はさんだまま手の平ひらへ顎あごを載せて硝子ガラスごし越に吹き荒れた庭を眺めるのが癖くせであつた。それが済むと載せた顎を一応撮つまんで見る。それでも筆と紙がいつしよにならない時は、撮んだ顎を二本の指で伸のして見る。すると縁側えんがわで文鳥がたちまち千代ちよ千代と二声鳴いた。

筆を擱おいて、そつと出て見ると、文鳥は自分の方を向いたまま、留り木とまぎの上から、のめりそうに白い胸を突き出して、高く千代と云つた。三重吉が聞いたらさぞ喜ぶだろうと思ふほどな美いい声で千代と云つた。三重吉は今に馴なれると千代と鳴きますよ、きつと鳴きま

すよ、と受合つて歸つて行つた。

自分はまた籠の傍へしやがんだ。文鳥は膨らんだ首を二三度豎横に向け直した。やがて一団の白い体がぼいと留り木の上を抜け出した。と思うと奇麗な足の爪が半分ほどえつぽ縁から後へ出た。小指を掛けてもすぐ引つ繰り返りそんな餌壺は釣鐘のように静かである。さすがに文鳥は軽いものだ。何だか淡雪の精のような気がした。

文鳥はつと嘴を餌壺の真中に落した。そうして二三度左右に振つた。奇麗に平して入れてあつた粟がはらはらと籠の底に零れた。文鳥は嘴を上げた。咽喉の所で微な音がする。また嘴を粟の真中に落す。また微な音がする。その音が面白い。静かに聴いていると、丸くて細やかで、しかも非常に速かである。葦ほどな小さい人が、黄金の槌で瑪瑙の基石でもつづけ様に敲いているような気がする。

嘴の色を見ると紫を薄く混ぜた紅のようである。その紅がしだいに流れて、粟をつつく口尖の辺は白い。象牙を半透明にした白さである。この嘴が粟の中へ這入る時は非常に早い。左右に振り蒔く粟の珠も非常に軽そうだ。文鳥は身を逆さまにしないばかりに尖つた嘴を黄色い粒の中に刺し込んで、膨くらんだ首を惜気もなく右左へ振る。籠の底に飛び散る粟の数は幾粒だか分らない。それでも餌壺だけは寂然として静かである。重いも

のである。餌壺の直径は一寸五分ほどだと思ふ。

自分はそつと書齋へ帰つて淋しくペンを紙の上に走らしていた。縁側では文鳥がちちと鳴く。折々は千代千代とも鳴く。外では木枯が吹いていた。

夕方には文鳥が水を飲むところを見た。細い足を壺の縁へ懸けて、小さい口に受けた。一雫を大事そうに、仰向いて呑み下している。この分では一杯の水が十日ぐらい続くだろうと思つてまた書齋へ帰つた。晩には箱へしまつてやつた。寝る時硝子戸から外を覗いたら、月が出て、霜が降っていた。文鳥は箱の中でことりともしなかつた。

明る日もまた気の毒な事に遅く起きて、箱から籠を出してやつたのは、やつぱり八時過ぎであつた。箱の中ではとうから目が覚めていたんだらう。それでも文鳥はいっこう不平らしい顔もしなかつた。籠が明るい所へ出るや否や、いきなり眼をしばたいて、心持首をすくめて、自分の顔を見た。

昔美しい女を知っていた。この女が机に凭れて何か考えているところを、後から、そつと行つて、紫の帯上げの房になつた先を、長く垂らして、頸筋の細いあたりを、上から撫で廻したら、女はものう気に後を向いた。その時女の眉は心持八の字に寄っていた。それで眼尻と口元には笑が萌していた。同時に恰好の好い頸を肩まですくめていた。文

鳥が自分を見た時、自分はふとこの女の事を思い出した。この女は今嫁に行った。自分が紫の帯上でいたずらをしたのは縁談のきまつた二三日後である。

餌壺にはまだ粟が八分通り這入っている。しかし殻もだいたい混っていた。水入には粟の殻が一面に浮いて、苛く濁っていた。易えてやらなければならぬ。また大きな手を籠の中へ入れた。非常に要心して入れたにもかかわらず、文鳥は白い翼を乱して騒いだ。小さい羽根が一本抜けても、自分は文鳥にすまないと思つた。殻は奇麗に吹いた。吹かれた殻は木枯がどこかへ持つて行つた。水も易えてやつた。水道の水だから大変冷たい。

その日は一日淋しいペンの音を聞いて暮した。その間には折々千代千代と云う声も聞えた。文鳥も淋しいから鳴くのではなからうかと考えた。しかし縁側へ出て見ると、二本の留り木の間を、あちらへ飛んだり、こちらへ飛んだり、絶間なく行きつ戻りつしている。少しも不平らしい様子はなかつた。

夜は箱へ入れた。明る朝目が覚めると、外は白い霜だ。文鳥も眼が覚めているだろうが、なかなか起きる気にならない。枕元にある新聞を手取るさえ難儀だ。それでも煙草は一本ふかした。この一本をふかしてしまつたら、起きて籠から出してやろうと思ひながら、口から出る煙の行方を見つめていた。するとこの煙の中に、首をすくめた、眼を細くした、

しかも心持眉を寄せた昔の女の顔がちよつと見えた。自分は床の上に起き直った。寝巻の上へ羽織を引掛けて、すぐ縁側へ出た。そうして箱の蓋をはずして、文鳥を出した。文鳥は箱から出ながら千代千代と二声鳴いた。

三重吉の説によると、馴れるにしたがつて、文鳥が人の顔を見て鳴くようになるんだそうだ。現に三重吉の飼っていた文鳥は、三重吉が傍にいさえすれば、しきりに千代千代と鳴きつづけたそうだ。のみならず三重吉の指の先から餌を食べると云う。自分もいつか指の先で餌をやつて見たいと思つた。

次の朝はまた怠けた。昔の女の顔もつい思い出さなかつた。顔を洗つて、食事を済まして、始めて、気がついたように縁側へ出て見ると、いつの間にか籠が箱の上に乗っている。文鳥はもう留り木の上を面白そうにあちら、こちらと飛び移っている。そうして時々は首を伸して籠の外を下の方から覗いている。その様子がなかなか無邪気である。昔紫の帯上でいたずらをした女は襟の長い、背のすらりとした、ちよつと首を曲げて人を見る癖があつた。

粟はまだある。水もまだある。文鳥は満足している。自分は粟も水も易えずに書齋へ引込んだ。

昼過ぎまた縁側へ出た。食後の運動かたがた、五六間の廻り縁を、あるきながら書見するつもりであった。ところが出て見ると粟がもう七分がた尽きている。水も全く濁ってしまった。書物を縁側へ抛り出しておいて、急いで餌と水を易えてやった。

次の日もまた遅く起きた。しかも顔を洗って飯を食うまでは縁側を覗かなかった。書齋に帰ってから、あるいは昨日のように、家が籠を出しておきはせぬかと、ちよつと縁へ顔だけ出して見たら、はたして出してあつた。その上餌も水も新しくなつていた。自分はやつと安心して首を書齋に入れた。途端に文鳥は千代千代と鳴いた。それで引込めた首をまた出して見た。けれども文鳥は再び鳴かなかつた。げげんな顔をして硝子越に庭の霜を眺めていた。自分はとうとう机の前に帰つた。

書齋の中では相変らずペンの音がさらさらする。書きかけた小説はだいぶんはかどつた。指の先が冷たい。今朝埋けた佐倉炭は白くなつて、薩摩五徳に懸けた鉄瓶がほとんど冷めている。炭取は空だ。手を敲いたがちよつと台所まで聴えない。立つて戸を明けると、文鳥は例に似ず留り木の上にじつと留っている。よく見ると足が一本しかない。自分は炭取を縁に置いて、上からごんで籠の中を覗き込んだ。いくら見ても足は一本しかない。文鳥はこの華奢な一本の細い足に総身を託して黙然として、籠の中に片づいている。

自分は不思議に思った。文鳥について万事を説明した三重吉もこの事だけは抜いたと見える。自分が炭取に炭を入れて帰った時、文鳥の足はまだ一本であった。しばらく寒い縁側に立って眺めていたが、文鳥は動く気色けしきもない。音を立てないで見つめていると、文鳥は丸い眼をしだいに細くし出した。おおかた眠たいのだろうと思つて、そつと書斎へ這入ろうとして、一步足を動かすや否や、文鳥はまた眼を開いた。同時に真白な胸の中から細い足を一本出した。自分は戸を閉てて火鉢へ炭をついだ。

小説はしだいに忙しくなる。朝は依然として寝坊をする。一度家のものが文鳥の世話をしてくれてから、何だか自分の責任が軽くなつたような心持がする。家のものが忘れる時は、自分が餌をやる水をやる。籠かごの出し入れをする。しない時は、家のものを呼んでさせる事もある。自分はただ文鳥の声を聞くだけが役目のようになつた。

それでも縁側へ出る時は、必ず籠の前へ立留たちどまつて文鳥の様子を見た。たいていは狭い籠を苦にもしないで、二本の留り木を満足そうに往復していた。天氣の好い時は薄い日を硝子越ガラスこしに浴びて、しきりに鳴き立てていた。しかし三重吉の云つたように、自分の顔を見てことさらに鳴く気色はさらになかつた。

自分の指からじかに餌を食うなどと云う事は無論なかつた。折々機嫌きげんのいい時は麵麩パンの

粉などを人指指ひとさしゆびの先へつけて竹の間からちよつと出して見る事があるが文鳥はけつして近づかない。少し無遠慮に突き込んで見ると、文鳥は指の太いのに驚いて白い翼つばさを乱して籠の中を騒ぎ廻るのみであつた。二三度試みた後のち、自分は氣の毒になつて、この芸だけは永久に断念してしまつた。今の世にこんな事のできるものがあるかどうかはなはだ疑わしい。おそらく古代の聖徒せいんとの仕事だろう。三重吉は嘘うそを吐ついたに違ちがない。

或日の事、書齋で例のごとくペンの音を立てて侘わびしい事を書き連つらねていると、ふと妙な音が耳に這入はいつた。縁側でさらさら、さらさら云う。女が長い衣きぬの裾すそを捌さばっているようにも受取られるが、ただの女のそれとしては、あまりに仰山ぎょうさんである。雛段ひなだんをあるく、内裏だいりびな雛ひなの袴はかまの襷ひだの擦すれる音とでも形容したらよかろうと思つた。自分は書きかけた小説をよそにして、ペンを持ったまま縁側へ出て見た。すると文鳥がぎようずい行水ぎようずいを使つていた。

水はちようど易かえ立たてであつた。文鳥は軽い足を水入の真中に胸毛むなげまで浸ひたして、時々は白い翼つばさを左右にひろげながら、心持水入の中にしやがむように腹をお押しつけつつ、総身そうみの毛を一度に振ふつている。そうして水入の縁ふちにひよいと飛び上る。しばらくしてまた飛び込む。水入の直径は一寸五分ぐらゐに過ぎない。飛び込んだ時は尾も余り、頭も余り、背は無論余る。水に浸つかるのは足と胸だけである。それでも文鳥は欣然きんぜんとして行水ぎようずいを使

っている。

自分は急に易籠を取つて来た。そうして文鳥をこの方へ移した。それから如露を持つて風呂場へ行つて、水道の水を汲んで、籠の上からさあさあとかけてやった。如露の水が尽きる頃には白い羽根から落ちる水が珠になつて転がった。文鳥は絶えず眼をぱちぱちさせていた。

昔紫の帶上でいたずらをした女が、座敷で仕事をしていた時、裏二階から懐中鏡で女の顔へ春の光線を反射させて楽しんで事がある。女は薄紅くなつた頬を上げて、繊い手を額の前に翳しながら、不思議そうに瞬をした。この女とこの文鳥とはおそらく同じ心持だろう。

日数が立つにしたがつて文鳥は善く嘖する。しかしよく忘れられる。或る時は餌壺が粟の殻だけになつていた事がある。ある時は籠の底が糞でいっぱいになつていた事がある。ある晩宴会があつて遅く帰つたら、冬の月が硝子越に差し込んで、広い縁側がほの明るく見えるなかに、鳥籠がしんとして、箱の上に乗っていた。その隅に文鳥の体が薄白く浮いたまま留り木の上に、有るか無きかに思われた。自分は外套の羽根を返して、すぐ鳥籠を箱のなかへ入れてやった。

翌日文鳥は例のごとく元氣よく囀さえずっていた。それから時は時々寒い夜よるも箱にしまつてやるのを忘れることがあつた。ある晩いつもの通り書齋で専念にペンの音を聞いていると、突然縁側の方でがたりと物の覆くつがえつた音がした。しかし自分は立たなかつた。依然として急ぐ小説を書いていた。わざわざ立つて行つて、何でもないといいましたから、気にかからないではなかつたが、やはりちよつと聞きき耳みみを立てたまま知らぬ顔ですましていた。その晩寝たのは十二時過ぎであつた。便所に行つたついで、気がかりだから、念のため一応縁側へ廻つて見ると――

籠は箱の上から落ちてゐる。そうして横に倒れてゐる。水みず入いれも餌壺えつぼも引繰ひくくり返かえつてゐる。粟あわは一面に縁側に散らばつてゐる。留り木は抜け出している。文鳥はしのびやかに鳥籠さんの棧さんにかじりついてゐた。自分は明日あしたから誓つてこの縁側に猫を入れまいと決心した。翌あくるひ日文鳥は鳴かなかつた。粟を山やま盛もり入れてやつた。水を漲みなぎるほど入れてやつた。文鳥は一本足のまま長らく留り木の上を動かかなかつた。午ひるめし飯めしを食つてから、三重吉に手紙を書こうと思つて、二、三行書き出すと、文鳥がちちと鳴いた。自分は手紙の筆を留めた。文鳥がまたちちと鳴いた。出て見たら粟も水もだいぶん減つてゐる。手紙はそれぎりにして裂いて捨てた。

翌日よくじつ文鳥がまた鳴かなくなつた。留り木を下りて籠の底へ腹をお押しつけていた。胸の所が少し膨ふくらんで、小さい毛さげが漣なみのように乱れて見えた。自分はこの朝、三重吉から例の件で某所まで来てくれと云う手紙を受取つた。十時までにと云う依頼であるから、文鳥をそのままにしておいて出た。三重吉に逢あつて見ると例の件がいろいろ長くなつて、いつしよに午飯を食う。いつしよに晩飯ばんめしを食う。その上明日あすの会合まで約束して宅うちへ歸つた。歸つたのは夜の九時頃である。文鳥の事はすっかり忘れていた。疲れたから、すぐ床へ這はいつて寝てしまつた。

翌日あくるひ日眼ひまが覚さめるや否や、すぐ例の件を思ひだした。いくら本人が承知だつて、そんな所へ嫁にやるのは行末ゆくすえよくあるまい、まだ子供だからどこへでも行けと云われる所へ行いく気になるんだらう。いったん行けばむやみに出られるものじゃない。世の中には満足しながら不幸おちいに陥おちいつて行く者がたくさんある。などと考かんえて楊枝ようじを使つて、朝飯を済ましてまた例の件を片づけに出掛けて行つた。

歸つたのは午後三時頃である。玄関がいてうへ外がい套たうを懸かけて廊下伝いに書齋へ這はい入るつもりで例の縁側へ出て見ると、鳥籠が箱の上に出してあつた。けれども文鳥は籠の底に反そつ繰くり返かえつていた。二本の足を硬く揃そろえて、胴と直線に伸ばしていた。自分は籠の傍わきに立つて、

じつと文鳥を見守った。黒い眼を眠ねむっている。瞼まぶたの色は薄うす蒼あおく変かった。

餌えつぱ壺つばには粟あわの殻からばかり溜たまっている。啄ついばむべきは一粒もない。水入は底の光るほど涸かれている。西へ廻まわった日が硝子戸ガラスどを洩やれて斜しやめに籠かごに落ちかかる。台に塗うるしった漆うるしは、三重吉の云いつたごとく、いつの間にか黒味くろみが脱ぬけて、朱しゆの色いろが出て来た。

自分は冬の日に色づいた朱の台を眺ながめた。空からになつた餌壺えつぱを眺ながめた。空むなしく橋を渡わたしている二本の留とどり木を眺ながめた。そうしてその下に横よこたわる硬い文鳥を眺ながめた。

自分はこの手で両手に鳥籠かかを抱かかえた。そうして、書齋しよざいへ持つて這はい入いった。十畳の真中へ鳥籠おろを卸おろして、その前へかしまつて、籠の戸を開いて、大きな手を入れて、文鳥を握にぎつて見た。柔やわらかい羽根はねは冷ひえきつている。

拳こぶしを籠から引き出して、握にぎつた手を開けると、文鳥は静てのひらに掌てのひらの上にある。自分は手を開ひらけたまま、しばらく死んだ鳥を見つめていた。それから、そつと座布団ざふどんの上に卸おろした。そうして、烈はげしく手を鳴ならした。

十六になる小女こおんなが、はいと云つて敷居際しきいぎわに手をつかえる。自分はいきなり布団の上にある文鳥を握にぎつて、小女の前へ抛ほうり出した。小女は俯うつむ向むいて畳を眺ながめたまま黙もくっている。自分は、餌えをやらないから、とうとう死んでしまつたと云いながら、下女の顔を睥にらめつけ

た。下女はそれでも黙っている。

自分は机の方へ向き直った。そうして三重吉へ端書をかいた。「家人が餌をやらなものだから、文鳥はどうとう死んでしまった。たのみもせぬものを籠へ入れて、しかも餌をやる義務さえ尽くさないのは残酷の至りだ」と云う文句であった。

自分は、これを投函して来い、そうしてその鳥をそっちへ持って行けと下女に云った。下女は、どこへ持って参りますかと聞き返した。どこへでも勝手に持って行けと怒鳴りつけたら、驚いて台所の方へ持って行った。

しばらくすると裏庭で、子供が文鳥を埋るんだ埋るんだと騒いでいる。庭掃除に頼んだ植木屋が、御嬢さん、ここいらが好いでしようと云っている。自分は進まぬながら、書齋でペンを動かしていた。

翌日は何だか頭が重いので、十時頃になつてようやく起きた。顔を洗いながら裏庭を見ると、昨日植木屋の声のしたあたりに、小さい公札が、蒼い木賊の一株と並んで立っている。高さは木賊よりもずっと低い。庭下駄を穿いて、日影の霜を踏み碎いて、近づいて見ると、公札の表には、この土手登るべからずとあった。筆子の手蹟である。

午後三重吉から返事が来た。文鳥は可愛想な事を致しましたとあるばかりで家人

が悪くとも残酷だともいつこう書いてなかった。



## 青空文庫情報

底本：「夏目漱石全集10」ちくま文庫、筑摩書房

1988（昭和63）年7月26日第1刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版夏目漱石全集」筑摩書房

1971（昭和46）年4月～1972（昭和47）年1月

入力：柴田卓治

校正：大野晋

1999年5月12日公開

2011年3月20日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 文鳥

夏目漱石

2020年 7月18日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>